

李泳禧・任軒永『対話 韓国民主化運動の歴史 —行動する知識人・李泳禧の回想』出版によせて

(『むくげ通信』297号、2019.11.24より)

飛田雄一



私が文章を書く唯一の目的は「真実」を追求すること、ただそこに始まり、それに尽きる。／真実とは一人の人間の所有物ではなく、隣人と分かち合うべきものだから、そのために私は文章を書かねばならなかった。／文章を書くことは「偶像」に挑戦する行為である。／それはいつもどこでも苦

痛を伴わなければならなかった。／かつて、そして今もそうであり、永遠にそうなのだろう。／しかし、その苦しみをなくして人間の解放と幸福、社会の進歩と栄光はありえないのだ。李泳禧『偶像と理性』1997年、巻頭言

本書は、李泳禧・任軒永対話集『対話—ある知識人の生と思想』（ハンギル社、2005年3月）の翻訳である。訳者は、館野哲、二瓶喜久江。明石書店2019年8月、四六版、584頁の大著である。

先生は、1929年平安北道零山郡北鎮面生まれで、42年京城公立工業学校に入学。45年勤労働員を忌避して故郷にもどり解放を迎えた。47年両親弟の4人で38度線を越え、50年に海洋大学を卒業後、英語教師をしていたが朝鮮戦争勃発後、入隊し陸軍中尉となり「国連軍連絡将校団」に勤務。57年除隊後、「合同通信社」（ソウル）に入社した。その後、朝鮮日報外信部長などをへて72年漢陽大学助教授となったが、民主的言論のゆえに6度拘束され、大学を3度解任されている。2000年11月執筆中に脳出血で右半身が麻痺し治療に専念されていたが、2010年12月、肝不全により亡くなられた。自伝の執筆を依頼されていたがご自身での執筆が不可能となり、それにかわるものとして本書が対話形式で出版されることになったのである。

6章からなる本書の章題は以下のとおりである。

- 第1章 植民地朝鮮の少年
- 第2章 戦争の中の人間を見つめて
- 第3章 戦うジャーナリストとして
- 第4章 学究の道へ—現代中国研究の開拓
- 第5章 1980年、裏切られた「ソウルの春」
- 第6章 アメリカ資本主義の克服—ペンで戦った半世紀

章題をみて先生を知るものはワクワクする。ここでその内容を紹介することはできないが、いくつかを紹介してみたい。

1929年平安北道零山郡北鎮面生まれの先生は、その後、隣の同道朔州郡外南面大館洞で育った。そこは水豊発電所のおかげで30年代に電灯がついている。それは1937年頃、小学校2年生のときで、平安北道定州から水豊まで鉄道が敷設された時代のことを次のように書かれている。

この鉄道が大館まで敷設されたある日のこと、私たち小学生は、授業が終わるやいなや、教科書を入れた風呂敷包みを背負ったまま、大挙して汽車見物にでかけました。(略)真っ黒で仰天するほどの大きな機関車を初めて見て、そのうえ、あの天地が震えるような音を間近に聞いた私たちは、心底肝をつぶしました。驚いてその場にひっくり返った友だちもいたほどです。あの65年前の私と大館の友だちの姿が、いまでも目の前に浮かんでくるように思われます。(36頁)

また先生は軍隊で「麗水・順天反乱事件」を直接体しています。「無知蒙昧」が上官の命令によって麗水に上陸することになります。そして当時のことを次のように書かれている。

私はあのとき生まれて初めて数えきれないほどの遺体を見ました。麗水女子中学校の運動場は遺体で埋め尽くされていました。制服を着た女学生の手首から時計がなくなり、白い跡だけ残っていた情景が目には焼きついています。(略)悲惨な民族相残[同じ民族の殺し合い]の現場でした。その後の数日間は、麗水市内と周辺地域で銃声が止むことはありませんでした。どれほど多くの無辜の人々が虐殺されたのかと思うと、本当に胸が痛みます。(77～78頁)

また本通信で何回か紹介した原州の張堯淳先生に尊敬の念をもたれていたようで、「年齢は一歳半ほど上で、人格・思想・品位・経綸、すべての面において、仮に私が十歳ほど年上であっても、お仕えしたい方でした」(359頁)、「張先生はひとことであんなら、生きている「老子」なのです。それだけではなく、彼は家門の本来の宗教である天主教の信者として、韓国のキリスト教徒のなかで、ひょっとすると

最もイエスに近い方だったかもしれません。こんな表現は語弊があるかも知れないし、褒めすぎに聞こえるかもしれません。しかし、少なくとも私は 30 年以上の付き合いを通じてそう信じています」(432 頁)と書かれている。

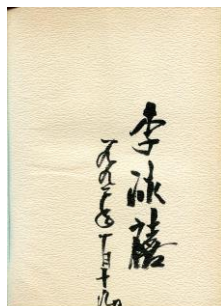


先生の著作集全 12 巻が、2006 年、ハンギル社より発刊されている。内容は以下のとおりです。

1. 転換時代の論理 (1974)
2. 偶像と理性 (1977)
3. 80 年代の国際情勢と朝鮮半島 (1984)
4. 分断を超えて (1984)
5. 逆説の弁証 (1987)
6. 逆情 (1988)
7. 自由人 (1990)
8. 鳥は「左・右」の翼で飛ぶ (1994)
9. スフィンクスの鼻 (1998)
10. 半世紀の神話 (1999)
11. 対話 (2005)
12. 21 世紀 朝の思索 (2006)

学生センターの朝鮮語講座のテキストとして「転換時代の論理」を翻訳したことも思い出される。神戸に来られたとき、その本にサインをしていただいた。訳者の館野哲さんが訳者あとがきに次のように書かれている。

「晩年には『李泳禧著作集』に揮毫もしていただいていた。いまそのページを確かめてみると、署名がふらつき何やら心許ない。永年ペンを持つお仕事をされ、名筆家としても知られていた先生だけに、手元不如意になられ、さぞかし口惜しい思いをされたことだろう」 私がいただいたサインは伸びのある、元気いっぱいのサインだ。



先生は 1992 年 10 月 16 日、学生センター 20 周年講演会に来てくださり「“新たな世界秩序”と日本・韓国」のテーマでご講演くださった。日本語での講演で、録音を聞き直すととても懐かしいなつかしい。「聞き取りにくいことがあれば手を挙げて聞いてください。話は正確なことが必要ですから」と話を始

められた。また国際電話料金の話があり、「188 か国の中で一番安いのが韓国でその次に安いのは？」と先生が質問、答えはアメリカ、韓国と同じ料金だとのこと。ほんとに先生らしいイントロだった。そこから「アメリカの支配する社会」の話に入った。



翌日、先生は東大阪のプラモデル店に行きたいとのことと案内した。子どものためのものだといひながら、先生の趣味でもあるようだ。「私は若い頃には木工細工が趣味でした。机、椅子、ベッド、その他家具などを自分で作ったり、修繕したりしました。二人の息子も幼い頃には、私といっしょにいろんな物を作り、今でもそうしたことはかなり器用です」(554 頁)という記述もある。

実は神戸で腰痛になりセンター近くの鍼灸院で治療して帰国された。「名医だ」とは先生の言葉であった。後日、ソウルから先生の腰痛が再発したとの報を聞いた。淡路島へドライブしたりして神戸での過労がたたったのかと心配したが、帰国後座った姿勢で長時間プラモデル作業をしたことが原因だと分かって安心した。その後、ソウルでドライブに連れていってくださったときにうかがった「真相」である。



先生の本には著作集にも納められている『鳥は「左・右」の翼で飛ぶ』がある。単に左派右派のことを論じたものではなく、先生の考え方は柔軟でバランス感覚に優れていると言われている。『対話』のなかで自身も朴正熙時代に大学を追放されたことについても、ムソリーニの弾圧のことにふれ「これに比べれば、朴政権の追放措置はまだましだったと言えるかもしれません」(352 頁)と書かれたりもしている。また親日派を追求する活動に対して、「私は徹底的な民族反逆主義者と親日派を、民族精気の確立のために明らかにし、また、そのうち罪の重い者に対しては歴史的断罪をすべきだと主張していますが、だからといって、洪蘭坡までその範疇にいれることには疑問を抱いています」(164・5 頁)とも書かれています。洪蘭坡 (1897~1941) は、「鳳仙花」「故郷の春」などを作曲した著名な音楽家だ。

本書によって李泳禧先生のことをよく知ることができた。対話をしてくださった任軒永先生、訳者の館野哲さん、二瓶喜久江さんに感謝したい。